

私たちの自然



公益財団法人 日本鳥類保護連盟
Japanese Society for Preservation of Birds

特集▶野鳥を知る・楽しむ(山地・高山帯編)



カワセミの行動

東京都府中市で撮影

カワセミに魅せられてバードウォッチングや野鳥撮影を始めた方も多いのではないのでしょうか。この可愛さ、美しさをみれば、多くの人をとりこにするのも無理はありません。でもカワセミは双眼鏡や撮影機材などで皆さんの財布の中身を空にする恐ろしい(?)鳥です。

江口欣照 (東京都府中市)



ハスの蕾に止まる



ホバリング



食事中



捕食の瞬間

植物豆知識〈40〉 ご近所散歩で、不思議発見！



道端にチューリップの花が咲いています。近づいて見ると長い花茎^{かけい}の途中から不思議な形の葉が出ていました(右上)。種子植物の栄養器官は「根・茎(幹)・葉」の3種類だけですがそれぞれの形は多様に変化します。

花が出来る場合には先端の葉から雌蕊^{めしべ}、雄蕊^{おしべ}、花弁^{かべん}、萼片^{がくぺん}、苞片^{ほうぺん}などに姿を変え、それらが合わさって「花」を形成します。本来ならば葉が付かない花茎の途中から出た不思議な形の葉は「葉なのか? 萼片なのか?」と、自身でも決めかねたまま中途半端な形になったのでしょうか? 後日に訪ねるとすでに花びらは散り落ち、この葉も花茎とともに枯れ落ちていくようです(右下)。

杉崎光明 (樹木医・東京都江戸川区)

*チューリップの花弁と萼片は同型で3枚ずつあり、花びら^{かひ}(花被片)は6枚となります。



スタッフだより

シジュウカラの親子

実家に簡易的な水場を作りセンサーカメラで観察していたところ、シジュウカラが親子で訪れていることが確認できました。この時、雛は近くで見ているだけでしたが親鳥はさっと水浴びをして2羽で飛び去っていきました。親鳥はこのように巣から出たばかりの雛に水場の場所と水浴びのやり方を教えていたのかもしれませんがね。この時期ならではの微笑ましい光景でした。

松永聡美 (調査研究室)



私たちの自然

第 66 巻 No.659 2025 年 7・8 月号



特集 野鳥を知る・楽しむ(山地・高山帯編)

2 山地・高山のおすすめ探鳥地(飯島大智)

5 登山で鳥も観察しよう!(上田恵介)

7 換羽について(藤井 幹)

9 フィールドスケッチの楽しみ方(水谷高英)

11 本部主催のテグス拾いを実施しました(連盟 事務局)

12 生きものはつながっている
ブッポウソウ(漆谷光名)14 生きものはつながっている
“ヤンマ”と呼ばれるトンボ(木村和未)

16 羽根探偵の謎解きファイル ～エピソード 3～(郷上マナツ)

18 第 79 回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」開催報告

19 総裁賞受賞者のことば(上田恵介)

20 私たちが自然保護活動から学んだこと その 3
(第 58 回全国野生生物保護活動発表大会 発表校)

21 野鳥を詠む俳句を募集します

22 柳澤紀夫氏が旭日単光章を受章されました!

22 ライフ × サントリー ご支援について

23 連盟だより / インフォメーション

24 使用済み切手・カード類提供のお願い / 商品の注文について / バックナンバーの提供について
/ 会費の有効期限の見方 / 広告募集 / 編集後記

ネイチャーフォト

カワセミの行動(江口欣照)

植物豆知識 < 40 > ご近所散歩で、不思議発見!(杉崎光明)

スタッフだより

シジュウカラの親子(松永聡美)

表紙のことば

上木辰彦

ブッポウソウ

(広島県で撮影)

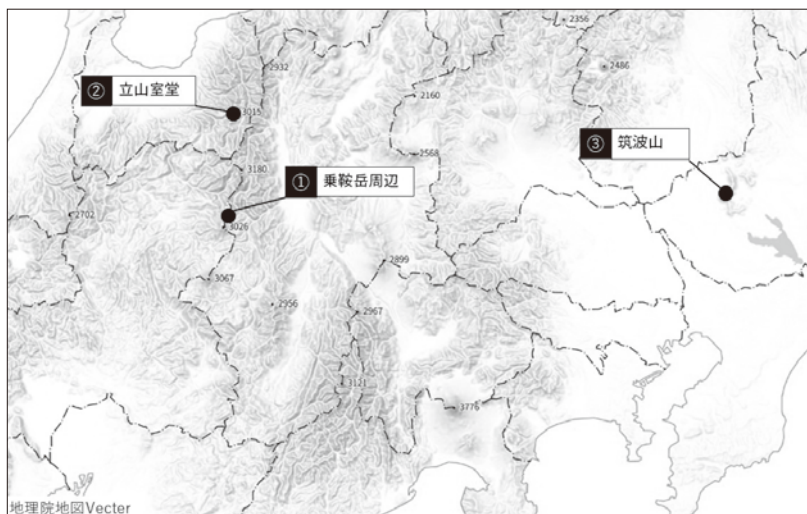
毎年、4 月後半になると、ブッポウソウの巣箱を探して歩きます。2019 年、ある畜舎の入り口に巣箱があるのを見つけ、こんな人が出入りするところにやって来るものだろうかと思っていますと、すぐそばで虫をくわえて飛ぶブッポウソウの姿が。慌てて写真を撮りながら、そのたくしましさに感心しました。



山地・高山のおすすめ探鳥地

筑波大学生命環境系 助教 飯島大智 文・写真

天高くそびえる「山」は、古くから人々の信仰を集めてきただけではなく、多くのバードウォッチャーや研究者を魅了してきました。山では、登山道をのぼるにつれて環境が劇的に変化するため、少し移動するだけでまったく異なる野鳥をみることができます。今回は、そんな山地や高山のおすすめ探鳥地として、3000m級の山岳に加えて、比較的簡単に登山ができる低山もご紹介します。



①乗鞍岳（3026m）

乗鞍岳は長野県と岐阜県のあいだに位置し、剣ヶ峰を主峰とする複数のピークが連なる山岳です。夏季には、長野県側は乗鞍高原から、岐阜県側はほおのき平からバスを利用して高山帯を訪れることができます。ゆるやかに広がる山裾に沿って登山道や道路が整備されており、さまざまな標高でバードウォッチングを楽しむことができます。

●高山帯：^{たたみだら} 畳平周辺（標高約 2800m）

山麓から出発したバスの終点は、標高 2702m の「畳平バスターミナル」です（写真 1）。畳平の周辺は高木が生えることのできない高山帯であり、ライチョウ（写真 2）を観察する絶好のスポットです。乗鞍岳の高山帯は、日本でも有数のライチョウの個体数を誇ります。6 月下旬から 7 月頃には、ライチョウの家族を観察できる可能性もあるでしょう。家族を見つけた場合には、驚かさないように遠くから観察しましょう。

高山植物のお花畑などでは、ライチョウに加えてイワヒバリ（写真 3）を観察することもできます。また、高山帯には高山植物だけでなく、様々な場所に

ハイマツが自生します。ハイマツの枝先を探せば、か細い声でさえずるカヤクグリや、ハイマツの実をあつめるホシガラスが観察できるでしょう。

長野県と岐阜県の両県からバスで畳平にアクセスできる時期はおおよそ 7 月から 10 月です。荒天時にはバスが運休になることもあるので、訪れる際にはホームページ等での情報収集が必須です。

期待できる鳥：ライチョウ、カヤクグリ、イワヒバリ、ビンズイ、ホシガラス、ハリオアマツバメなど



写真 1 乗鞍岳の畳平。写真左側にある建物からバスに乗車できます。遠くに見える雪に覆われた山々は、北アルプスです



写真2 ライチョウのオス。高山帯を代表する鳥類です



写真3 イワヒバリ。高山帯で繁殖し、冬には低地でも見られます

●^{くらいがはら}亜高山帯：位ヶ原山荘周辺（標高約 2400m）

バスや徒歩で山を少しおりと、高木のない高山帯から、針葉樹に覆われる亜高山帯に到達します。長野県側の「位ヶ原山荘」の周辺は、亜高山帯で繁殖する野鳥を観察する絶好のスポットです。森林限界が位置する標高にも近いいためか針葉樹の樹高が低く、見上げるのではなく、針葉樹林で生きる野鳥を同じ目線で観察することができます。ルリビタキ（写真4）やメボソムシクイの個体数が多く、早朝には両種のさえずりに包まれるような体験ができます。また、針葉樹の枝先に目を凝らせば、キクイタダキの姿を観察することもできます。車道はバスが往来しますので、周囲に気を配り、安全に注意しながら野鳥を観察するようにしましょう。

期待できる鳥：ルリビタキ、メボソムシクイ、キクイタダキ、ヒガラ、ホシガラス、キバシリ、キセキレイなど

●山地帯：乗鞍高原観光センター周辺（標高約 1500m）

長野県側のバスの始発駅である乗鞍高原観光センターの周辺には、複数の散策路が整備されています。その散策路の周辺は落葉広葉樹であるシラカバやミズナラに覆われており、亜高山帯とは環境が異なります。その環境の違いは、見られる鳥たちにも反映され、落葉樹林を生活場所とする様々な野鳥が見ら

れます。散策路沿いでは、コガラやヒガラが1年を通して見られ、夏にはコルリやキビタキが美しいさえずりを響かせているでしょう。オオアカゲラやヤマセミを観察する機会に恵まれるかもしれません。

乗鞍高原は温泉郷でもあります。探鳥のあとは、温泉で体を休めるのも良いでしょう。

期待できる鳥：コルリ、キビタキ、オオルリ、コガラ、オオアカゲラ、ヤマセミなど

②立山室堂（標高約 2450m）

北アルプス北部に位置する立山は、日本で最も観光客が多い山岳の1つです。立山黒部アルペンルートを利用して、長野県側および富山県側から高山帯にアクセスできます。標高 2450m に位置する室堂ターミナルから野外に出れば、そこには高山帯のお花畑がひろがっています（写真5）。

ターミナルから徒歩数分の場所でも、ライチョウに出会う確率が高いです。おすすめは、ターミナルを出発し、みくりが池を周回するコースです。それほど長距離を歩かずアップダウンも小さいので、登山というよりも散策に近い感覚で高山鳥を観察できるでしょう。池を周回するあいだに、いくつものライチョウの縄張りを通過することになります。ライチョウを1羽だけではなく、複数羽観察できるかもしれません。ただし、みくりが池を周回するルートは、石畳で整備されています。石に足を取られ、足をく



写真4 亜高山帯で繁殖するルリビタキ。繁殖期の個体の密度には驚かされます

じいてしまわないよう登山靴やトレッキングシューズなど、足首をしっかりと固定できる靴を履いてバードウォッチングを楽しみましょう。

期待できる鳥：ライチョウ、イワヒバリ、カヤクグリなど

③筑波山（877m）

関東平野の北部から突き出した八溝山地の先に位置する筑波山は、日本百名山のなかで最も標高の低い山です。麓から頂上まで登山することも、ロープウェイやケーブルカーで山頂付近までアクセスすることもできます。

都心からのアクセスも抜群な筑波山ですが、そこでみられる野鳥は低地とは異なります。山頂付近に広がるブナ林では、1年を通してコガラやヒガラが見られるでしょう。また、過去にはホシガラスが記録されたこともあります。そんな筑波山を訪れるおすすめの季節は冬です。山頂付近では、乗鞍岳や立山といった高山帯で繁殖していたカヤクグリが越冬し、また群れで餌をついばむハギマシコを観察することもできるでしょう。また、運がよければ、山頂付近や山麓でオオマシコにも出会えるかもしれません。

期待できる鳥：コガラ、ヒガラ、キビタキ、オオルリ、カヤクグリ、ハギマシコ



写真5 立山室堂から主峰である雄山（3003m）へ続く登山道

都会の喧騒から離れ、雄大な景色と多様性に溢れる様々な野鳥を楽しむことができる「山」は魅力的な探鳥地です。人里離れた場所だからこそ、安全管理には十分気をつけたいところです。

本州では低山域から高山帯にいたる全域がツキノワグマの生息地です。鉢合わせして、クマが驚けば攻撃を受ける場合もあります。クマ鈴やクマスプレー（唐辛子スプレー）を持参することは、安全な山行には重要です。また、低体温症にも十分に気をつけましょう。

亜高山帯や高山帯は6月頃まで大部分が雪に覆われますし、一度天気が崩れれば、5、6月であっても気温は氷点下近くになります。霧が出れば自分がどこにいるかわからなくなり、低体温症に加えて遭難の危険性も高まります。地図やレインウェアを持参し、天気予報をしっかりとチェックするだけでなく、悪天候時は無理をせずに予定を変更するなど、余裕のある安全な日程で、無理のない野鳥観察を楽しんでいただきたいです。

Profile

飯島 大智（いいじま・だいち）。1994年茨城県生まれ。筑波大学生命環境系助教。山岳の鳥類群集を対象とした生態学的な研究を専門にしています。

登山で鳥も観察しよう！

日本野鳥の会 会長 上田恵介 文・写真

緑も濃い季節、夏山シーズンの到来です。里山や低山の林ではオオルリ、キビタキ、クロツグミなどの夏鳥たちはもう雛を巣立たせています。低山帯の夏鳥たちより少し遅れて、高い山では鳥たちの繁殖が最盛期です。登山にいくなら、ついでにバードウォッチング。低山帯よりもう少し標高の高い、ブナ林があるような山から針葉樹に覆われた亜高山帯、さらにハイマツと岩場が広がる高山帯の鳥たちを紹介します。

●ブナ林帯

本州中部地域ではブナ林は標高が500mを越える、少し深い山になります。それより南の本州、四国、九州では標高700m以上の山、北海道南西部、東北地方ではそれより標高の低い地域から分布しています。カラ類ではヒガラが出てくる標高です。ゴジュウカラの「フィフィフィ」という声や、アカハラやクロツグミ、トラツグミ、アオバトの声、コルリやコマドリのさえずり、そしてツツドリの「ポポポポ…」という声も聞こえるかもしれません。アカゲラ、オオアカゲラなどもこの標高帯の住人です。

●亜高山帯の森の鳥

さらに上へ高度を上げていくと、木の種類が落葉樹からコメツガやオオシラビソなどの常緑針葉樹に変わってきます。だいたい1500mを越えるあたりでしょうか。ここからが亜高山帯です。亜高山帯は本州中部では大体標高1600mから2400mの標高帯です（東北や北海道では標高はもっと低い）。

亜高山帯に入ると出現する鳥たちの種類も変わってきます。ヒガラと共にコガラの高い声や、ルリビタキ（写真1）とメボソムシクイ

の大きな声があちこちから聞こえてきます。ルリビタキの雄の青い色は成鳥の証しで、若い雄は雌によく似た地味で目立たない姿をしており、さえずりはできますが、美しい青い羽に生え換わるには3年かかるといわれています。

メボソムシクイのさえずりは「銭取り、銭取り」と聴きなされています。彼らのさえずりの期間は長く、時には9月下旬まで、個体によっては10月初旬までさえずっているものもあります。この鳥がなぜ他の鳥がすでにさえずらなくなる時期まで、長い期間さえずるのかはよくわかっていません。

樹林の中からミソサザイの長いさえずりも聞こえてきます。ミソサザイはもっと低い標高帯にもいますが、巣材に苔を使うので、苔むした亜高山帯の森に多い鳥です。ジュウイチやウソもこの標高帯の住人です。

耳をすましていると「チリチリ」というキクイタダキのかすかな声も聞こえるかもしれないので、耳に集中してみてください。彼らは針葉樹の高い樹冠を生活圏にしているので、声は聞こえても、葉の間で動き回っているシルエットが見えるだけで、なかなか双眼鏡に捉えるのが難しい小鳥です。

●高山帯の鳥

高山は生きものにとって厳しい環境です。気温は低く、雪の積もっている期間も長く、エサも多くは



写真1 ルリビタキ（富士山）



写真2 ホシガラス（ハヶ岳）



写真3 カヤクグリ（白山）

ありません。となると必然的に繁殖期間は短くならざるを得ません。けれどそういう厳しい環境でがんばって生きている鳥たちがいます。ホシガラス（写真2）、ライチョウ、イワヒバリ、カヤクグリ（写真3）は標高2500mを越える高山に棲む鳥です。

ホシガラスは北海道から九州にかけての高山帯、亜高山帯に棲み、登山者にはなじみ深い鳥です。ハイマツの球果が大好きで、球果が実る夏から秋にかけて、ハイマツのまわりでよく見かけます。ホシガラスは静かな調理場所で、球果をほぐして、種子を取り出し、それを喉袋いっぱい詰めて込んで、亜高山帯にある貯蔵場所へ運んでいきます。

誰もが知っている高山の鳥といえばライチョウでしょう。日本アルプスでは7月末になると登山道でヒナを連れた雌に出会うことがよくあります（写真4）。そんな時はカメラで追い回さずに、なるべくそっとしておいてやってください。

イワヒバリも高山への登山者には馴染み深い鳥です。5～6羽の多夫多妻の群れで生活し、山小屋の周辺にも群れで棲みついています。イワヒバリもライチョウと同様、人をあまり恐れない鳥なので、被写体にはいい鳥です。

カヤクグリも日本の高山を代表する鳥のひとつです。北海道から四国にかけて分布し、ハイマツの中に営巣します。雄はハイマツのてっぺんなど目立つ場所で「チリリリリリ、ピイチリリ…」と鈴の音のような綺麗な声でさえずります。



写真4 ライチョウの親子（乗鞍岳）

●山でのバードウォッチングの注意点

山で鳥を見る時の注意点は、山登りの注意点と同じです。岩がゴロゴロしている登山道では、足首を守るために、靴はしっかりした登山靴を履くことをお勧めします。また夏は熱中症になりやすいので、水は必需品です。歩く時間と天候にもよりますが、1～2リットルの水は持ちましょう（ついでに非常食も）。山の天候は変わりやすいので、蒸れにくい材質の上下セパレートの雨具は必需品です（尾根では傘は役に立ちません）。それと夏は雷にはとくに注意です。雷は午後に発生しやすいので、早めに小屋にたどり着く行程を組んで、可能ならスマホで雨雲レーダーを常にチェックしましょう。

鳥を見るための道具はコンパクトな双眼鏡（8倍程度）1つで十分です（スコープは不要）。それから大きな望遠レンズ付きカメラを抱えて歩くのはやめましょう。両手が使えない状況では、上りもそうですが、とくに下り道は非常に危険です。崖に沿った登山道では、うっかり鳥に気を取られていると滑落の危険もあります。山で鳥を見る時は、必ずたち止まって、腰を落ちつけて観察しましょう。“自分の命は自分で守る”、これが山での野鳥観察の基本です。

Profile

上田恵介（うへだ・けいすけ）。1950年、大阪府生まれ。日本野鳥の会会長。立教大学名誉教授。動物生態学者。理学博士。鳥類を中心に動植物全般の進化生態学の他、環境問題の研究にも取り組む。著書に『野外鳥類学を楽しむ』（海游舎）など多数。

換羽について

連盟 調査研究室長 藤井 幹 文・写真

鳥が鳥である証は何かと聞かれれば、迷うことなく「羽根があること」と答えます。昆虫も空を飛びますが、持っているのは羽根ではなく翅（はね）です。コウモリには翼はあっても羽根はありません。羽根は鳥だけが保有し進化させてきた唯一無二の構造物なのです。逆に鳥は羽根しか持っていないとも言えます。口ひげのようなものも羽根の羽軸だけが発達したものですし、飛翔や保温、雨除けはもちろんのこと、異性にアピールするためにある装飾的なものも羽根なのです。

体温が40度を超える鳥たちにとって、保温できないことは死活問題で、羽根の綿毛（わたげ）の部分（綿状羽枝）では図に示したような羽枝・小羽枝が空気を溜め込み、保温効果を維持しています。そして羽弁と呼ばれる板状になった部位が、その熱を逃がさないよう体を覆っているのです。また、羽弁には小羽枝同士が絡まっている部分に空気が含まれていて、それが雨水をはじき、雨水が皮膚まで浸透して体温を低下させることを防いでいます。この羽根の構造をしっかりと維持するために、寒い冬でも鳥たちは水浴びや羽繕いをして羽根のクリーニングと機能維持を怠りません。

しかし、いくら大事に扱っても、羽根はケラチン質でできているので繊細で壊れやすいものです。血も通っていないので、傷んだ部分が再生することはありません。羽根が傷んでくれば保温も撥水もままならず、飛翔にも影響が出てくるでしょう。そのため定期的に古い羽根が抜けて新しい羽根に生え換わります（写真1）。これを換羽と呼んでいます。

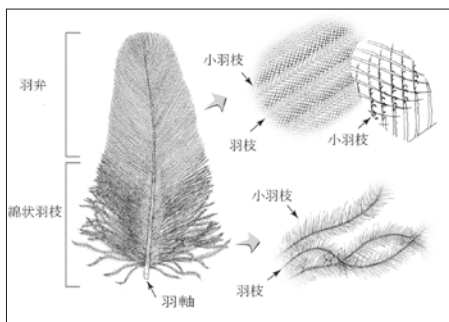


図 羽の構造

●換羽様式

換羽は小さい鳥であれば1年に1回、体のすべての羽根が新しく生え換わります。といっても人間が着替えをするように一気に換わるわけではありません。飛翔に影響を及ぼさないよう、体温も維持できるよう、少しずつ順々に換わっていきます。翼や尾羽では、左右対称に換羽が進んでいくのも特徴の一つです（写真2）。オオタカぐらいのサイズであれば、1年に1回、すべての羽根が抜けかわりますが、クマタカやイヌワシなどの大型種になると、何年もかけて換羽が行われます。この2種でいえば5年周期です。

いつ、どの羽根から抜けかわっていくかは鳥のグループによって異なり、この順序を換羽様式と呼んでいます。

●換羽時期

鳥に限らず、生物は子孫を残していかなければなりません。鳥も繁殖をして子孫を残しますが、繁殖には膨大なエネルギーを使います。繁殖のための戦略は種によって違いますが、テリトリーを守ってボロボロになるオス、自分のエネルギーを分け与えて卵を産むメス、それぞれが生命を削るかのように相当なエネルギーを繁殖に費やすのは多くの種に共通するでしょう。一方、換羽も羽根という構造物を一



写真1 換羽中のヒヨドリの尾羽。矢印の2枚が生え換わり中の尾羽

から作るわけですから、これにも相当のエネルギーを必要とします。そのため、1年に1回全身換羽するような種では、繁殖が終わって一段落してから本格的な換羽が始まります。そして渡り鳥は秋には移動を開始し、ここでも相当なエネルギーを消費するので、繁殖

が終わって渡りが始まるまでの数か月、日本でいえば7月から9月にかけてが、多くの種の換羽時期となります。この時期は暑いために木陰から出てこないということもありますが、換羽中だからということもあるでしょう。野外に出ても鳥があまり目につかなくなる時期でもあります。

しかし、これらは繁殖をするという前提ですが、繁殖をしない若い個体や繁殖に早々に失敗して繁殖を諦めた個体は、換羽のリズムが変わってきます。おそらく繁殖を促すホルモンが換羽を抑制しているでしょう。特に若い個体は繁殖期など関係なく換羽をします。繁殖期に尾羽がまったくないハシブトガラスが飛んでいるのを見かけることもあります。こういった個体は繁殖をしていない個体だと思います。

●飛べなくなる鳥

これまで、換羽は飛翔に問題がないように行われると紹介してきましたが、飛べなくなる鳥もいます。それはハクチョウやガンカモの仲間、そしてツルの仲間です。これらの鳥たちは、飛ぶための風切羽が一斉に抜け落ちて、一時的に飛べなくなります。そのため外敵が近寄ってこないような広い湿地帯や湖沼などで換羽が行われます。

なぜリスクの高い方法を選ぶのかと疑問に思いますが、多くのハクチョウやガンカモ類、ツルの仲間が繁殖する北方地域では、雪や氷に閉ざされている期間が長く、雪や氷が解けて繁殖に適した時期が訪れるのは日本の春よりもずっと後になります。そしてその繁殖できる期間は短く、あっという間に餌が乏しくなる

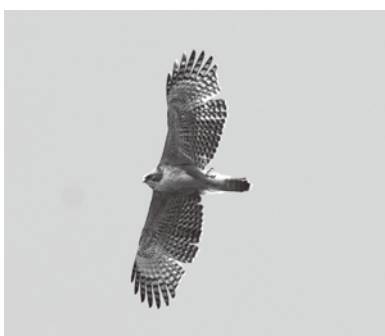


写真2 左右対称に換羽による抜けがある
クマタカ



写真3 飾り羽を持つコサギ（左）と白い繁殖羽を持つ
カワウ（右）

シーズンが到来します。そのため繁殖が終わって渡りが始まるまでの期間が短く、換羽がゆっくりとしたペースで行われるのは都合が悪いのかもしれませんが。それに対応して進化した生態ではないかと思います。

●繁殖羽

繁殖期に特別な羽根を生やすものもいます。サギの飾り羽やカワウの白い羽根がこれにあたります（写真3）。これらは普段まとっている羽根を換羽するのではなく、普段の羽根とは別にその時期だけ生やします。

●エクリプス

カモの仲間は他の鳥よりも1回多い換羽をします。カモの多くは渡り鳥ですが、繁殖のための派手な色合いは外敵に目を付けられやすくなります。そのため、渡りが始まる頃にはメスに似た地味な色合いの羽根に換羽しています。この状態をエクリプスといいますが、渡りが終わり越冬地に到着すると、また換羽が始まり、派手な繁殖羽になります。そして越冬地でメスにディスプレイをしてつがいになるので、この換羽はそれなりに時間もかかりますし、何よりメスとのつがい関係を維持しなければいけないので、繁殖地に戻るときは換羽をしません。派手な色合いのままメスと一緒に繁殖地に戻ります。

このように鳥は必ず換羽をするので、野外には鳥がいる数だけ羽根が落ちています。もし落ちていた羽根を見かけたら換羽について思い出してみてください。

フィールドスケッチの楽しみ方

野鳥イラストレーター 水谷高英 文・イラスト

●フィールドスケッチとは

多くのバードウォッチャーは、観察の記録をフィールドノートにつけたことがあると思います。フィールドノートは、フィールドで得た情報を後日に残すためのものです。しかし、後で見返したときに文字と数字だけでは味気ないもの。そこに、その日見たものや感じたことの小さなスケッチが添えられているだけで、脳の記憶再生スイッチが入ることがあります。

そこで今回は、フィールドでのスケッチの楽しさや、後で見返した時にも楽しめて、充実した資料となるようなフィールドノートのつけ方を紹介します。

●私がフィールドノートもつけるようになったのは

私は30代後半からバードウォッチングを始め、40歳には野鳥イラストレーターになっていました。故郷は「野鳥の暗黒地帯」と呼ばれた岐阜県で、ツグミを食べる文化のあった地域です。私は食べたことはありませんが、雑貨店では普通にカスミ網やトリモチが売られており、「ワイルド（悪いど）」な中学生時代は野山を駆け回り、野鳥を追っていました。大学進学で上京してまず驚いたのが、「野鳥との距離が近い!」ということでした。故郷では警戒心の強いキジバトは遠くのシルエットでしか見たことはありませんでした。しかし野鳥を追っていたことで、鳥の行動パターンやシルエットから鳥の動きを読む力が養われており、形態に関する基礎知識もありました。そのおかげで双眼鏡だけでも楽しいバードウォッチングを始めることができたのです。

40代半ば、野鳥イラストの仕事がメインになるとフィールドスコープを手に入れ、より精度の高い観察と記録が必要となりました。2003年1月から10年間、フィールドノートをつけることを決意し、実行しました。

●私のフィールドスケッチ

下の写真は、後から見ることを意識して(?)つけた最初のページです。ここから始まりました。ノートには環境だけがスケッチされており、文章による記録はありませんでした。最初から現在のスタイルが出来上がっていたのです!



●フィールドスケッチの効果は

これまでにつけたノート22冊、900ページに及ぶ長期の観察記録で、鳥たちの生態のサイクルや変化が見えてきました。そんな矢先、2011年3月11日に東日本大震災が起き、一時的に記帳もやむなく終了! (奇しくも、最初のノートのページには福島第一原発が描かれていました)

●10年の記録で見えてきたこと

定点観察では、明らかに地球温暖化による変化が感じられます。春のタカの渡り観察のスケッチでは、サクラの満開時期が早くなっていることや、タカの渡る高度がどんどん高くなっていることなどが分かります。20年前は、頭上近くを通過するサシバの羽色が分かり、雄・雌・幼鳥の識別ができ、スケッチに残せました。しかし近年は肉眼で見つけるのが難しいほどの高さで渡っていきます。

●フィールドスケッチを描こう

フィールドスケッチ（フィールドノート）は、あくまで後に再確認するためのものです。当時の状況が分かるよう、目にとまった情報や気になったことを簡潔に描いて残しましょう。



私は表紙が堅牢なので、コクヨの野帳を使用します。散策を中心とした観察には、軽量コンパクトなものでフットワークを良くします。図鑑やカメラなどもなるべく軽量コンパクトなものを選びます。

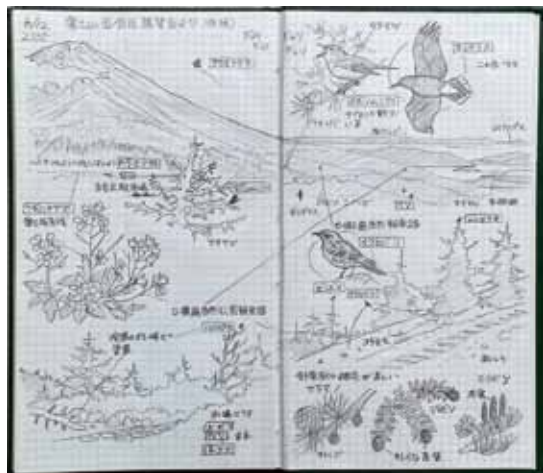
私は高齢ということもあり、なるべく荷物を少なくして身軽な状態でフィールドに出かけます。動き回れば、それだけ多くの出会いが期待できます（定点観察は別として）。最近のフィールド、特に珍しい鳥が出た場所では、超望遠レンズを装備したカメラの砲列が並び、フィールドスコープや双眼鏡だけを持つ観察派のバードウォッチャーは、あまり見かけなくなりました。いても隅で遠慮がちに観察しています。

バードウォッチング発祥の地・英国では、現在も観察派が主流。本来、日本人は古くから花鳥風月を愛で、楽しんできました。臆することなく、フィールドに出てみましょう。

●フィールドスケッチの描き方

・私の場合

場所、日付、時間、天候、気温（渡り観察では風速と風向き）を記入します。



- ①まずは景色を愛でながら、ゆっくりとした気分で環境（全景）を描く。全体を見ることで、その環境に目を慣らします。
- ②近景へと目を移し、鳥を見つけたら行動を肉眼や双眼鏡で追い、その記憶を環境の絵の中に描き込みます。フィールドスコープで拡大して観察できた場合でも、その場で描くのは慣れないと意外と難しいものです。
- ③空いた空間に簡単なスケッチと、印象に残ったことを記し、後から図鑑などを見て肉付けすれば、より良い資料になります。
- ④鳥たちの動きが止まった時は、周囲の植物を観察したり、鳥たちが食べていた種子などをルーペで見てスケッチします。

とにかく描き続ければ、自分にとって必要な情報や興味の対象が明確になり、オリジナルスタイルのノートが出来上がります！

Profile

水谷高英（みづたに・たかひで）。1951年岐阜県生まれ。武蔵野美術短期大学卒業。テレビ局勤務を経て、フリーのイラストレーターとなる。幼児向け教育絵本、アウトドア雑誌を経て、野鳥に関わる雑誌、広告、図鑑を手がける。主な著書に『野鳥フィールドノート』『野鳥フィールドスケッチ』、フィールドガイド『日本の野鳥』（文一総合出版）、『小学館の図鑑 NEO 鳥』（小学館）など。『みる野鳥記』（あすなろ書房）で第40回産経児童出版文化賞、サントリーの新聞広告で第21回読売広告大賞〈読者大賞〉を受賞。その他、電通賞。



連盟本部主催のテグス拾いを実施しました

2025年6月6日（金）、連盟本部主催でテグス拾いを実施しました。当初は5月18日（日）に開催を予定していましたが、荒天予報のため中止・延期となり、この日にあらためて実施することとなりました。それにもかかわらず、再度お申し込みくださった方々や、Team SPOON・東京都市大学の学生さん、これまでも活動に参加いただいたリピーターの方々にご参加いただき、連盟のスタッフを含めると総勢19名で活動を行うことができました。

活動は東京都の葛西海浜公園と葛西臨海公園で実施しました。参加者は2班に分かれ、一方は葛西海浜公園の西なぎさ、もう一方はその対岸にある葛西臨海公園側で、それぞれ釣り人の多いエリアを中心にテグスを拾い集めました（写真1）。活動前には、テグスを見つけるコツや、連盟に寄せられた実際に被害に遭った鳥の写真を用いながら、活動の主旨について説明しました。テグスや釣り針はプラスチックゴミなどより取り上げられることは少ないですが、野鳥など多くの生きものにとって脅威となります。一度野鳥に絡まってしまうと自然に外れることはまずないため、未然に防ぐことが何より重要です。

葛西臨海公園側は昨年に続いて2回目の実施でしたが、人出の多さやゴミのたまりやすい地形、清掃活動が葛西海浜公園に比べて少ないことなどの影響から、缶やペットボトルなどの一般ゴミが目立つ状態でした。当初はゴミばかりが目につきましたが、注意深く探すうちにテグスの多く集まっている場所も見つかり、着実

に回収を進めることができました。ただし時間が来たため、まだ回収しきれない箇所を残しての終了となりました。一方、西なぎさでは4年連続の実施となるため、これまでの継続的な取り組みが功を奏してか、テグスの量は以前よりも減少しているように感じられました。

最後に2班で回収量を共有したところ、想定以上のテグスが集まっており、参加者の皆さんも驚かれていました（写真2）。回収したテグスは持ち帰り、洗浄と計量を行いました。集計の結果、180g（2300m）となりました。長さに換算すると、見た目以上に量があるのが分かります。

2022年は77.9g（1012m）、2023年は97.0g（1261m）、2024年は67.1g（872m）を回収しています。1回の活動では多くのテグスを回収できますが、1年経つと再び蓄積していることが分かります。まだ実施できていない箇所もあるため、継続的な取り組みが必要であるとあらためて実感しました。

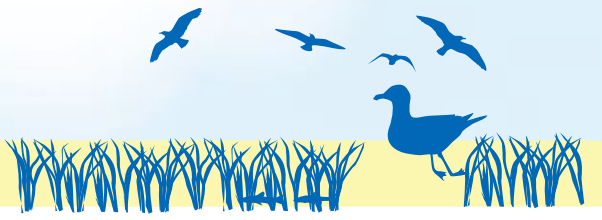
本活動にご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。来年も継続して実施する予定ですので、会員の方々には今後ともお力添えいただけると幸いです。



写真1 テグスやゴミを拾う参加者（葛西臨海公園側）



写真2 回収したテグス



ブッポウソウ

公益財団法人 日本鳥類保護連盟広島県支部長 漆谷光名 文・写真

●声のブッポウソウと姿のブッポウソウ

鳥に関心がなかった私は、夏の夕方にダム湖へコイ釣りに出かけていました。夜になり星が輝きだすと、「プッポッポー プッポッポー」と、高く澄んだ声^すが遠くから聞こえてきました。ブッポウソウの名前が鳴き声に由来していることが、なるほどとわかりました。10年後、この鳥が木製電柱の巣穴に出入りしていると聞き、観察に行きました。くちばしにくわえたトンボをヒナが待つ巣穴に運んだ後、しばらく電線で休んでいると、次の瞬間、別のブッポウソウが飛んできて、「ゲッゲツ、ギッギギッギャアツ」と激しく鳴き、闘い^{たたか}が始まりました。「あれ？ ブッポウソウはプッポッポーと鳴いていたのにおかしい」。困惑^{こんわく}した私は本で納得しました。

「昼間にこの鳥が観察された場所で、夜になると『ブッポウソウ』と鳴く声が聞こえてきたことから、長い間ブッポウソウは『ブッポウソウ』と鳴くものとして信じられてきた」と書かれていたのです。声のブッポウソウ（コノハズク）と姿のブッポウソウの真相が明らかになるまで1000年以上も経っていたとは、実に興味深い話ですね。



写真1 ブッポウソウ

●ブッポウソウってどんな鳥？

ブッポウソウはハトくらい（約30cm）の大きさで、森の宝石とも呼ばれ、体は暗緑色と青紫色の金属光沢をした美しい鳥です（写真1）。脚とくちばしは鮮やかな赤色で、翼の白い斑点^{あざ}は遠くからでもよくわかります。繁殖期^{はんてん}には体長の2倍以上の長い翼で宙返りをしたり、翼を畳んでラグビーボールのように変形し急降下します。

ブッポウソウが巣穴に入る姿を見た人たちの間で「電柱に穴を開けたのは誰なのか？」と話題になりました。後にブッポウソウはオオアカゲラが開けた穴を利用していたことがわかりました。ブッポウソウのくちばしは下に湾曲^{わんきよく}しているので穴を開けることができません（写真2上）。それに対しオオアカゲラ（キツツキ科）は先がとがっているため、硬い木に穴を開けることができます（写真2下）。

尊く不思議な力をもつ霊鳥^{れいちよう}とされていたブッポウ



写真2 ブッポウソウのくちばし（上）とオオアカゲラのくちばし（下）（両方とも剥製）

ソウは、もともと個体数は多くない鳥でした。オオアカゲラが開けた巣穴や大木にできた樹洞^{じゅどう}が減り、その上、木製電柱がコンクリート製に変わったことで巣穴がなくなるなど、環境が大きく変わり、個体数は激減しました。そのため環境省はブッポウソウを絶滅危惧ⅠB類^{ぜつめつきぐ}（近い将来絶滅の危険性が高くなる種）に指定しました。その後、研究者や愛好家の努力により、電力会社のコンクリート柱や自然木などに巣箱を設置する取り組みが始まり、西日本を中心に個体数が少しずつ回復していきました。

●ヒナの成長と渡り

5月上旬に飛来したブッポウソウは、繁殖地に到着^{とうちやく}すると雄が雌にトンボをプレゼントするなどしてカップルができます（写真3）。5月下旬から6月上旬に4～5個の卵を産み、7月上旬には孵化^{ふか}したヒナにエサとなるトンボやコガネムシなどを運ぶようになります。

巣立ちの時期は7月下旬。その後ヒナは巣箱に帰らず、周辺の山林で親からエサの取り方を教えてもらいながら成長していきます。

9月初旬には越冬地に渡るため、日本では見られなくなります。近年ブッポウソウの体にGPS（衛星利用で位置を特定できる軽量な記録装置）を着け、渡りのルートを明らかにする調査がおこなわれています。



写真3 トンボをくわえて雄（右）が雌（左）にプレゼント

●ふしぎなくせ

ふしぎなことにブッポウソウの巣箱の中からカタツムリの殻^{から}やアルミニウム片などが見つかっていま

す。親鳥がヒナのために運んできたことはまちがいなさそうです。何が目的でしょうか。エサとまちがえたから？ 光るものに興味があったから？ など、いくつかの可能性について確かめられました。その結果、どうやら硬いコガネムシなどの消化のはたらしを助けるため、ひきうす代わりに運んできたのではないかという結論に落ち着きました。人間が飲み込んだら一大事！ 絶対真似してはいけませんよ。

●今、そしてこれから

巣箱は10年も経つと底板が落ちて使えなくなるため、決して大丈夫とは言えません。保護活動の継続が望まれます。広島県では毎年、児童と大人と一緒に巣箱作りをしています（写真4）。その結果、個体数が着実に増え、広島県のレッドデータリストは準絶滅危惧種として絶滅の心配が少し和らきました。

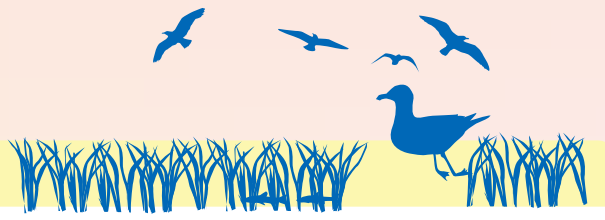
環境省のレッドリストでは、現在でも絶滅危惧ⅠB類に指定されています。近年地球温暖化や農薬散布による昆虫の減少、水質の汚染などによる周囲の環境は厳しさを増しています。ブッポウソウの生息環境を守ることは、多くの生きものであふれる自然を大切にしていくことであり、私たちの命を未来につなぐことになるでしょう。



写真4 電柱や樹木に設置するための巣箱を作る作木小学校児童（撮影：坂根憲昭）

プロフィール

漆名光名（うるしだに・こうめい）。幼少を島根県の田舎で過ごし、大学卒業後広島県中学校理科教師として就職。現職のとき「風切羽による推進力発生原理機」を全国研究大会で公開。退職後「江の川流域の野鳥観察記録集 Hello Birds」発行、「条虫を排出するアオバトの観察（山階鳥研）」受理。2021年4月から（公財）日本鳥類保護連盟広島県支部長。



“ヤンマ” と呼ばれるトンボ

栃木屋工房 主宰 木村和未 文・写真

皆さんはヤンマと呼ばれるトンボの仲間をご存知でしょうか？ 今日ではヤンマに関して私が面白いと思っている事を皆さんにお伝えしたいと思います。

● “ヤンマ” とはなにか？

写真1から写真4の4種のトンボはいずれも名前に“～ヤンマ”とつきますが、実はこの中で学問的な意味でのヤンマはギンヤンマ（写真1）だけなのです。どういう事かと言いますと、分類上のヤンマとはヤンマ科というグループに属する種の事を言い、この中ではギンヤンマがそれにあたります。

では他の3種はどうでしょうか。腹部の先の方に内輪のような平たい突起をもつウチワヤンマ（写真2）。全長80mm程の大型のこのトンボはサナエトンボ科に属します。有名なオニヤンマ（写真3）は全長100mmを越えるものもある日本最大のトンボ、まさにヤンマの中のヤンマといったイメージですが、これはこれでオニヤンマ科という別のグループ。ならば一回り小さいコオニヤンマ（写真4）も

オニヤンマ科？ いえいえこちらはサナエトンボ科。ややこしいですね。

ヤンマという言葉をごい国語辞典で引くと「大型のトンボ」と書かれています。昔は大きなトンボの事を皆俗称として“ヤンマ”と呼んでいたのでしょうか。俗称としてのヤンマ、分類学的な意味でのヤンマ、視点が違うとヤンマとは何か？ の答えは違ってくるわけです。

● ヤンマはどこに棲む？

次はこれらヤンマの棲む環境を見てみましょう。トンボはヤゴ（幼虫）の生育環境の視点から主に流水性と止水性の2グループに分けられます。流水性の種とは河川や水路のような流れる水の環境、すなわち流水域に棲むものでオニヤンマ、コオニヤンマがこれにあたります。さらに細かく分けるなら、オニヤンマの方が川の上流や樹林の細流、水路などわりと狭い流れを好むのに対し、コオニヤンマは樹林近くの中流から下流という広めの流れを好みま



写真1 ギンヤンマ（撮影：井野勝行氏）



写真2 ウチワヤンマ（撮影：井野勝行氏）



写真3 オニヤンマ（撮影：井野勝行氏）



写真4 コオニヤンマ（撮影：井野勝行氏）

す。一方、止水性の種は水たまりや湖沼など流れない水の環境、すなわち止水域に棲むものでギンヤンマ、ウチワヤンマはこちらにあたります。もう少し細かく分けるなら、ギンヤンマが水田などわりと浅めの水辺にも棲むのに対し、ウチワヤンマは深めの沼などを好みます。

●私たちの目線

このように水域によってそこに棲むヤンマの種類が分けられるわけですが、なぜかこの原則に反して湖にコオニヤンマが棲んでいたたり（写真5）、河川にギンヤンマが棲んでいたたりする事があります（写真6）。それはたまたま飛来してその場に居合わせたという話ではなく、その水域で成虫が産卵し、ヤゴが羽化し、生息域として定着している状況があるのです。これはいったいどういう事なのでしょう？ 秘密はそこが止水域なのか流水域なのか、それを決める視点が私たちとヤンマでは違う事にある様です。



写真5 コオニヤンマの棲む大きな湖の岸边（撮影：徳田龍弘氏）

●ヤンマの目線

大きな湖には風で波が立ち、波打ち際には水がかき回されて酸素の溶け込む量が多くなります。するとそこはまるで水流により多くの酸素が溶け込む河川のような水質になり得るのです。私たちが陸から見て止水域としてイメージする湖も、水中でダイレクトに水質の影響を受けて生活するコオニヤンマ目線では言えばそこは私たちの言う“流水域”と見なされる場合があるわけです。

また、私たちは河川を見て流水域としてイメージしますが、複雑に入り組んだ河川環境では時に本流から分岐した淀み^{ぶんきよど}が生まれます。流れが非常に緩くなった部分がギンヤンマ目線で“止水域”と見なされれば、そこは彼らの生息域となり得るわけです。

●他者を慮る^{おもひやる}

視点・目線が違うと物事の解釈^{かいしゃく}が違ってくる、これはとても面白い事であると同時にとても恐ろしい事でもあると思います。相手のためにしてあげているつもり^{おも}のその事は本当に相手が望んでいる事だろうか？ 自然のためにしているつもり^{おも}のその保護は本当に野生生物にとって良いものになっているだろうか？ 対人であれ対自然であれ、相手の視点・目線で考え慮る事を忘れては、私たちにも私たちを取り巻く自然環境にも未来はないと思うのです。



写真6 ギンヤンマの棲む複雑な河川環境の淀み（撮影：廣瀬大輔氏）

プロフィール

木村 和末（きむら・かずみ）。栃木屋工房主宰。野山でのフィールドワークから得た経験を基に自然や生き物をモチーフとした立体造形・アクセサリーを制作している。

羽根探偵の 謎解きファイル

エピソード3

さがみ
郷土マナツ

登場人物

羽根田 翔：探偵業をしているがなぜか羽根について異常に詳しく周囲からは羽根探偵と呼ばれている。
基本的に人見知りで不愛想だが羽根を見ると食いついてくる。

鳥居 明子：自然や生きものが好きな高校生。好奇心旺盛で明るい性格。

明子は祖父母の家に遊びに行った際に、最寄り駅のバスロータリーで見慣れない羽根がたくさん落ちていることに気がついた。拾い集めてはみたものの何の羽根か、なぜそこにたくさん落ちているのかさっぱり分からない。またどうしても知りたくなった明子は、先日ふとしたきっかけで訪れた羽根田の事務所に再び行ってみること…

明子：「羽根田さん、いますか〜？」

羽根田：「君、本当にまた来たのか!？」

明子：「はい、分からない羽根を沢山拾っちゃいまして…。どうしても何の鳥か気になります。これなんですけど!」

そう言うと明子はズカズカと事務所に入り、応接間のテーブルに拾ってきた羽根を広げた（写真1）。

明子：「この前祖父母の家に行ったんですけど、羽根が駅前の広場にたくさん落ちていて。このあいだ教えてもらったムクドリとも違うし、カラスにはこんな白い斑点ないし…」

羽根田：「ふ〜ん、なるほどね。」

羽根田はテーブルに並んだ羽根をまじまじと見つめた。

羽根田：「君の祖父母の家がどこか当てようか。神奈川県横浜だろう。」

明子：「えっ、なっ、なんで分かったんですか!? 羽根田さんって実は超能力者??」

羽根田：「タネを明かせば簡単なことだよ。その前にまずこれが何かだけど、黒味も強く風切羽に特徴的な白色が入っている。そしてムクドリの仲間のように羽軸の基部側の白色が目立つがムクドリよりも大きい。この特徴だけで種が想像できる。たぶん君に言っても分からないだろうが、これはハッカチョウの羽根なんだよ。」

明子：「はっかちょう?」

羽根田：「やっぱりわからないか。ちょっと待ちたまえ。」

羽根田はパソコンのフォルダを開き、自身で撮影したハッカチョウの写真を明子に見せた（写真2）。

羽根田：「ハッカチョウは外来種でかつては色々な場所で目撃されたんだが、現在は神奈川県と関西、四国の一部でしか定着していないんだそう。そして神奈川県でハッカチョウがいるのは横浜周辺。さらに駅前でこれだけたくさん落ちているとなるとねぐらの下だったことは明白で、ねぐらといえば横浜のあの駅前だけだからね。」

明子：「へ〜、いる場所が限られてるんですね。でも、関西か四国の可能性もあるのに、どうして横浜だって分かったんですか?」

羽根田：「実は私もハッカチョウの羽根を拾いに横浜のねぐらに行ったことがあってね。いろいろな部位の羽根



写真1 明子が拾ってきた羽根



写真2 ハッカチョウ

を拾いたかったんだがその時は風切羽しか拾えなかった。それで日を改めて後日行ってみると今度は尾羽がよく落ちてたんだよ。君が拾った羽根も風切羽や尾羽があったから、きっと何度も祖父母の家に行ったんだろうと思ってね。東京から何度も行っていると考えれば横浜の方だろうとあたりをつけたのさ。」

明子：「なるほど、そういうことですか！ さっすが探偵ですね！」

羽根田：「君に言われるとバカにされてる気分になるよ。」

明子：「でも何で拾える羽根の種類が時期によって変わるんでしょうか。」

羽根田：「まあいろいろなパターンがあるんだが、基本的には鳥は年に一回羽根が抜け変わるんだ。しかも大抵は抜ける順番が決まっている。ハッカチョウの換羽の順番を私ははっきり把握してる訳じゃないんだが多分ムクドリと似ているだろう。」

明子：「羽根って抜け変わってるんですね！ そう言えばうちの犬も季節が変わると夏毛から冬毛になるけど、鳥は順番まで決まってるんですか！ で、ちなみにどんな順番なんですか？」

羽根田：「は～、君はいちいちなんでも聞いてくるなあ。」

そう言う面と面とくさそうに羽根田は書棚から1冊の本を出して、そこに載っている図を指差しながら説明を始めた（図1）。

羽根田：「この部分が初列風切、英語で Primary だから略して P と表現する。さらにこの部分は次列風切で英語では Secondary だから S。多くの鳥は1番から羽根が抜け始めて2,3,4～9と順に進んでいく。ムクドリもP1～3から抜け始めてP5～7が抜ける頃になるとS1～2が抜け始め、さらにP8が抜ける頃には尾羽も抜け始める。ハッカチョウもこれと似ているだろう。」

明子：「へー、順々に抜けていくんですねえ！ なんだか不思議!!」

羽根田：「こんなマニアックな話聞いて面白いかね？」

明子：「はい、すごく！」

羽根田：「ふ～ん、じゃあついでに私が拾ったやつも見せよう。」

少し気を良くした羽根田は奥の部屋から以前に拾ったハッカチョウの羽根を持ってきて並べた（写真3）。

羽根田：「この左の2枚は最初に拾った羽根。おそらくS1とP5だろう。そしてこの右の2枚の羽根はそれからしばらく経ってから拾った羽根でP8か9と尾羽だよ。だからだいたいムクドリと一緒にではないかと私は考えている。」

明子：「そっか、ねぐらの下で羽根を拾ったらちゃんと日付ごとに分けてしまっておけば羽根の抜けた順番が分かるかもしれないんですね！」

羽根田：「まあ、そういう事だな。」

明子：「なるほど～、今度拾ったらちゃんと日付書いておこう!! こんなことまで分かっちゃうなんてやっぱり凄いなあ！ そうだ、弟子にしてください！」

羽根田：「なぜそうなる？ 絶対にお断りだ!!」

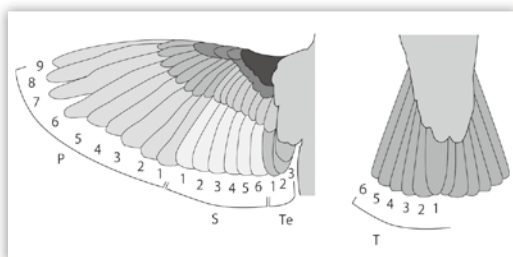


図1 羽根の名称



写真3 羽根田が拾ってきた羽根

to be continued

参考・引用文献

○大阪市立自然史博物館『日本のハッカチョウ分布調査(情報募集中)』

URL : <https://www.omnh.jp/wada/Aliens/Hakka.html>

○奥田幸江『集団場で採集した羽毛から調べたムクドリの風切羽と尾羽の換羽』(山階鳥雑誌、51:79-93,2019)

○藤井 幹『羽根識別マニュアル増補改訂版』文一総合出版

第79回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」開催報告

第79回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」を5月11日(日)に東京都・虎ノ門ヒルズにて常陸宮妃殿下ご臨席のもと、令和7年度野生生物保護功労者表彰の受賞者とその関係者をお招きして執り行いました。

令和7年度野生生物保護功労者表彰において、日本鳥類保護連盟総裁賞は、長年にわたり公益財団法人日本野鳥の会(以下、日本野鳥の会)の発展と様々な鳥類の研究を通じて自然保護活動に尽力されてきた、日本野鳥の会会長であり、立教大学名誉教授でもある上田恵介さんが受賞されました。

このほか、環境大臣賞、文部科学大臣賞、林野庁長官感謝状、日本鳥類保護連盟会長賞、環境省自然環境局長賞を、小宮輝之連盟会長と浅尾慶一郎環境大臣をはじめ、各賞の授与者から受賞者へ賞状を授与しました。

各賞の授与後には、総裁賞を受賞された上田恵介さんより、これまでに行ってこられた国内外におけ

る鳥類研究の内容と成果についてのご講演がありました。講演の後には、受賞者を代表してご挨拶をいただき、第79回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」は盛会のうちに終了いたしました。

なお、上田恵介さんの基調講演および受賞者代表挨拶は、当連盟のホームページにてご覧いただけます。

<https://www.jspb.org/tsudoi>



式典の様子

令和7年度 野生生物保護功労者表彰受賞者一覧

(敬称略)

■ (公財) 日本鳥類保護連盟 総裁賞 (1件)

上田 恵介 (埼 玉)

■ 環境大臣賞 (4件)

永谷 ミツ (北海道)
綿貫 豊 (北海道)
尾崎 清明 (茨 城)
龍郷町立 龍郷小学校 (鹿児島)

■ 文部科学大臣賞 (2件)

佐渡市立 行谷小学校 (新 潟)
福岡第一高等学校・第一薬科大学
附属高等学校 (福 岡)

■ 林野庁長官感謝状 (2件)

富岡 賢洋 (群 馬)
東蒲自然同好会 (新 潟)

■ (公財) 日本鳥類保護連盟会長賞 (3件)

松岡 三紀夫 (大 阪)
久保田 富士男 (香 川)
金城 輝雄 (沖 縄)

■ 環境省自然環境局長賞 (4件)

平田 勝男 (沖 縄)
仙台育英学園高等学校 (宮 城)
響灘ビオトープ愛好会 (福 岡)
公益財団法人 沖縄こどもの国
(沖 縄)

■ (公財) 日本鳥類保護連盟会長褒状 (12件)

石川 聖治 (宮 城)
安原 光一 (福 島)
金谷 道行 (群 馬)
藤井 忠之 (埼 玉)
谷 許 修 (静 岡)
大川 輔 (滋 賀)
今井 健二 (京 都)
宮原 明幸 (佐 賀)
松田 史哉 (熊 本)
東松山市立 桜山小学校 (埼 玉)
今治市立 桜井中学校 (愛 媛)
南九州市立 松ヶ浦小学校 (鹿児島)

■ 環境省自然環境局長感謝状

◎ 鳥獣保護管理員等 (53件)

阿部 島 譲 (北海道)
長原 廣幸 (北海道)
堀 徳康 (北海道)
羽行 英雄 (岩 手)
細田 義明 (岩 手)
菅原 耕一 (宮 城)
阿部 徳秋 (山 形)
大滝 芳春 (山 形)
田中 彰 (埼 玉)
安藤 彰彦 (神奈川)
小原 孝二 (神奈川)
齋藤 孝一 (新 潟)
星野 哲也 (新 潟)
高畑 晃 (富 山)
中村 培夫 (富 山)
羽田 健志 (山 梨)
藤森 栄治 (山 梨)
小平 榮三 (長 野)
渡辺 修治 (静 岡)
丸山 泰裕 (愛 知)
村松 和憲 (愛 知)
松井 正 (滋 賀)
河野 雅之 (京 都)
首藤 義典 (奈 良)
辻 保春 (奈 良)
春田 長嗣 (奈 良)

東 信和 (奈 良)
森下 楯夫 (奈 良)
森本 保司 (奈 良)
内田 満 (鳥 根)
畑 清信 (鳥 根)
藤原 正人 (岡 山)
大塚 茂生 (山 口)
加藤 重則 (山 口)
早瀬 国雄 (山 口)
原田 陽二郎 (山 口)
白川 智 (香 川)
土井 清三 (香 川)
三野 和哉 (香 川)
松岡 功 (高 知)
安岡 憲保 (高 知)
二田 公一朗 (福 岡)
佐々木 秀光 (佐 賀)
秀島 茂 (佐 賀)
石橋 豊記 (長 崎)
内田 庄吉 (長 崎)
山口 豊文 (長 崎)
横山 章 (長 崎)
佐藤 敏樹 (熊 本)
笹山 晃 (宮 崎)
遠目塚 稔 (宮 崎)
梅田 允 (鹿児島)
島中 道夫 (鹿児島)

総裁賞受賞者のことば

う え だ け い す け
埼玉県 上田恵介



日本鳥類保護連盟総裁賞をいただき、たいへん光栄に思っています。

本当のところを申しますと、私よりももっと野鳥保護、自然保護のために活動し、頑張っておられる個人、団体がいっぱいあるはずなので、私などがもらって良いものかというのが正直な感想です。しかし私が一つだけ自慢していいのは、大学在職中に私の研究室から多くの優れた若手研究者が巣立っていったことです。「もっとも基礎的なことがもっとも応用的なことである」と、私の尊敬する昆虫学者の伊藤嘉昭さん（故人）はいつも言っていましたが、鳥類学の基礎を身につけた研究者が、全国各地で、また各自の置かれた様々な部署で、自然保護のために力を尽くしてくれるであろうことを信じています。

— 受賞理由 —

1. 1967年頃から日本野鳥の会大阪支部の探鳥会リーダーを務め、支部幹事として支部運営に関わった。1968年大阪南港の野鳥を守る会を支部の若手メンバーと共に立ち上げ、南港野鳥園の建設の実現に貢献した。1971年には大阪自然環境保全協会の設立に関わった。また、大阪支部の代表（幹事長）として日本野鳥の会の全国支部長会議に参加し野鳥保護と会の運営に関わってきた。
2. さらに、日本野鳥の会の会報『野鳥』誌の編集に関わり、東大の樋口広芳氏と共に会の研究誌「Strix」の編集を任せられ、自然保護に関する多くのテーマを企画して科学的知見の蓄積に大きな貢献があったほか、野鳥の会の評議員として、また、副会長や会長として会の指導に当たり、これらを通じて鳥に関する科学的知識及

び保護思想を普及した。

3. 環境省の風力発電、オオタカ保護、鳥類標識調査、モニタリングサイト1000海鳥調査、鉛弾汚染問題など多くの委員会において委員または座長として関わることにより、鳥類保護行政にも貢献した。
4. 全国10か所以上の風力発電施設の設置に関して、有識者として検討委員会に加わり、カーボンニュートラルとネイチャーポジティブの両立に貢献した。また、福島原発事故の直後から、福島に入り、放射能汚染の鳥への影響に関する研究に尽力した。
5. 日本鳥学会会長を務めたほか、立教大学在任中の27年間に多くの若手鳥類学者を輩出し、鳥類保護の分野の研究者育成に貢献した。現在、全国多くの大学や研究所で門下生が活躍している。

— 基調講演 — ～鳥を見る楽しみ！～

セッカの繁殖生態の研究、小笠原諸島でのメジロの吸蜜行動の発見、ジュウイチのヒナによる宿主操作の発見、さらにオーストラリアやニューカレドニアでのさまざまな鳥類の調査研究など、国内外で幅広く研究を続けてこられた上田恵介さんに、総裁賞受賞までの歩みや、それまで解明されていなかった成果について基調講演をいただきました。ぜひ、講演の模様を下記リンクよりご覧ください。

https://youtu.be/W_agHxa0x-E



私たちが 自然保護活動から 学んだこと その3

—第58回

全国野生生物保護活動発表大会 発表校—

第58回 全国野生生物保護活動発表大会
(2024年11月開催)で受賞した学校から、
自然保護活動から学んだことを
紹介いただきました。

天然記念物カラスバトに関する保全生物学的 研究および啓蒙的活動

東京都 東京都立国分寺高等学校

東京都立国分寺高等学校生物部では、準絶滅危惧種のカラスバトの保全に役立てることを目的に、生態調査を12年間継続しています。調査方法は生徒とともに試行錯誤を重ねて開発し、現在は鳴き声を分析する音声班と、行動追跡を行うGPS班に分かれて活動しています。季節や個体ごとの行動を観察し、徐々に生態の解明が進んできました。研究成果は日本鳥学会や日本生態学会などで、生徒がポスター発表や口頭発表を行っています。これらの経験は、プレゼンテーション力やコミュニケーション力の向上にもつながっています。また、活動を通じてカラスバトの存在や生態が多くの人々に認知されてきたことを実感しています。



しきのSDGsプロジェクトいきもの いっぱい!ならプロジェクト

奈良県 奈良県立磯城野高等学校

磯城野高等学校の理科部・Flowersは、校内外の生物調査を軸に「しきのSDGsプロジェクト」を実践し、生物多様性の保全と普及に取り組んでいます。校内の「磯城野高校野生生物目録」を作成し、県レッドリスト記載種28種、未記載種25種、外来種197種を確認しました。また、田んぼの水族館や駅前のバタフライガーデンなど、生物多様性保全にも力を入れています。活動は様々な方から高く評価され、自然保護や地域貢献につながっていることを実感するとともに、励みになっています。これから学びを楽しみながら、生物多様性を守る活動を続けていきます。



ナゴヤダルマガエルや水生昆虫の保全に 向けた稲わらの活用に関する研究

愛知県 愛知県立佐屋高等学校

本校は愛知県愛西市にある農業科・家庭科の専門高校で、水田生態系の研究に長年取り組んでいます。今回は、絶滅危惧種ナゴヤダルマガエルの保全を目的に、稲わらを活用した調査について発表しました。稲わらは雑草防止やカエルの越冬環境づくりに効果があり、水生昆虫にも良好な環境を提供します。参加した生徒たちは調査を通じて分類や生息地への理解を深め、科学的知見から判断する力も身につけました。大学生との交流では、知識に加え教養や人間性を学び、自然と向き合う中で大きく成長しています。今後も地域と連携し、保全の輪を広げていきます。



野鳥を詠む 俳句を募集します

四季折々、日本の自然の中でたくましく生息する野鳥たち。春を告げるウグイスのさえずり、子育てをするために毎年軒先にやってくるツバメ、凍えるような寒さの中でも写真家を魅了するタンチョウのディスプレイ…。その野鳥たちと情景をとらえ、言葉に映しとる俳句を、あなたも詠んでみませんか？

『私たちの自然』では、2025年11・12月号に向けて「野鳥」を題材にした俳句を募集します。詠まれている季節は問いません。また、必ずしも野鳥の名前を入れる必要はありません。俳句に詠まれる鳥の生態をとらえていたり、そこにその鳥がいると感じさせる臨場感があつたりと、野鳥を楽しむ情景が浮かび上がる俳句をお待ちして

います（ニワトリやインコなどの家禽や飼っている鳥は対象外）。

選者は日本伝統俳句協会常務理事の田丸千種氏です。当連盟は取り上げられた野鳥について審査します。入選作品のうち、最優秀賞1句と優秀賞10句を選出し、『私たちの自然』の2025年11・12月号特集で、選評とともに掲載します。選ばれた方にはささやかながら景品もご用意しております（内容は現在調整中）。

野鳥を観察するだけでなく、野鳥が生息する情景を詠むことでその魅力をさらに深く味わうことができます。今回の俳句募集は、そんな新たな楽しみ方をご紹介します試みでもあります。みなさまのご応募を、心よりお待ちしております。

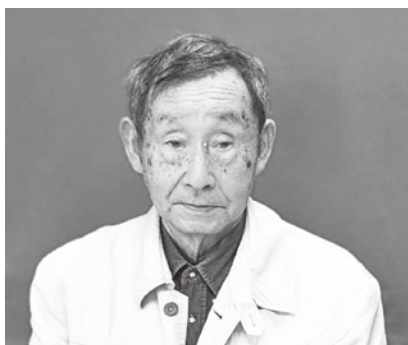
【募集要項】

- 募集期間：2025年7月1日（火）～9月19日（金）必着
 - 募集テーマ：「野鳥」※ 応募作品は未発表の句に限ります
 - 応募資格：どなたでもご応募いただけます（お一人につき3句まで）
 - 結果発表：『私たちの自然 2025年11・12月号』にて発表
 - 応募方法：
 - 郵送の場合：原稿用紙またはA4用紙などに、俳句、俳号（発表時に俳号で公開されます。本名は非公開）、お名前、お電話番号、メールアドレス、ご住所、年齢をご記入下さい。
〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5 第10田中ビル3F
日本鳥類保護連盟「俳句係」宛
 - Web投稿の場合：投句フォーム（Google フォーム）に必要事項を記入して送信して下さい。
- ◇投句フォーム：<https://forms.gle/pj4VR7GsYpe3DuVF8>



著作権について：入選作品の著作権は日本鳥類保護連盟および著作者に帰属します
入選外の作品の著作権は著作者に帰属します。※ 選考に関するお問い合わせはご遠慮ください

柳澤紀夫氏が旭日単光章を受章されました！



旭日単光章を受賞された柳澤紀夫氏

当連盟の元理事の柳澤紀夫（やなぎさわ・のりお）氏が、令和7年春の叙勲において鳥獣保護功勞により旭日単光章を受章されました。

柳澤氏は、令和7年5月21日（水）に環境省で行われた叙勲伝達式に出席され、その後皇居宮殿で天皇陛下に拝謁されました。

永年にわたる連盟での功績が認められたもので、当連盟としても大変誇らしいニュースです。柳澤さん、おめでとうございます。

受章理由

柳澤氏は鳥類やそれを取りまく自然を守り、自然と共生する社会づくりのため、また絶滅の危機にある鳥類の保護のため、長年にわたり我が国の野生鳥類の保護、調査研究に尽力し、その功績が認められこの度の受章となりました。

主な功績は次のとおりです。

1. 国の陸鳥・水鳥に関する各種調査等を実施した。
ガンやカモの調査、ワシミミズクの生息状況調査

を始め、タンチョウ生息地分散促進計画策定のための調査、水鳥生息地保全ネットワーク構築のためのシギ・チドリ類の重要生息地検討調査などを行った。さらに日中トキ保護協力のための中国の野生のトキの生息・繁殖状況等調査に協力し、国の鳥獣保護行政に貢献した。また、地方自治体等からの依頼を受けて、鳥類保護のための助言等を行った。

2. 国のトキの野生復帰事業の推進策について検討を行う専門家会合の一員として、放鳥されたトキの状況、放鳥計画等について検討するなどトキの野生復帰に関し、貢献をした。
3. 国の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト（レッドリスト）の鳥類の分野において、長年にわたり見直し作業メンバーの一員として貢献した。
4. 国の野生生物保護対策検討会検討員として、コウノトリ・トキ・ツル類などの保護対策に対し貢献した。
5. 平成6年4月にガラパゴス諸島イサベラ島で発生した大規模火災による野生生物への影響調査や保護対策に係る技術的助言を行う専門家チームで、鳥類の専門家として現地に派遣され、同島の保護対策に貢献した。

経歴

昭和39年4月 財団法人日本鳥類保護連盟勤務
平成6年6月 財団法人日本鳥類保護連盟理事
平成24年4月 公益財団法人日本鳥類保護連盟
理事（平成26年6月まで）
現在 公益財団法人山階鳥類研究所評議員

ライフ×サントリー ご支援について

近畿地方と関東地方でスーパーマーケットチェーン「ライフ」を展開するライフコーポレーションは、サントリー株式会社とともに、自然豊かな環境づくりに貢献するキャンペーンを2024年11月18日から2025年1月19日まで実施しました。本キャンペーンは、パーフェクトサントリービールを1本ご購入いただくごとに1円が、公益財団法人日本鳥類保護連盟に寄付されるという仕組みです。この期間中、合計247,248円の寄付が集まりました。

このご支援は、鳥類をはじめとする野生生物の保護活動に活用させていただき、生物多様性の保全と持続可能な社会の実現に向けて、大切に役立ててまいります。

キャンペーンにご参加いただいた皆様、そしてライフコーポレーション、サントリー株式会社の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

◇キャンペーン概要

<https://newscast.jp/news/7846606>



寄付をしてくださった方

下記の皆様から寄付をいただきました。
心よりお礼申し上げます。

<一般寄付>

花井一夫、大倉昌之、塚田裕志、栗谷知子
菊地金作、山畑有妃

<シマフクロウ保護のための寄付>

馬場由美子

(4月1日～5月31日、7名、敬称略・順不同)

新会員のみなさん

<特別支援会員>

伊藤直美

<個人正会員>

牛島延江、塚田裕志、斉藤文泰、関根秀敏、横田僚介、
菊池妃花、本田海翔、近藤龍哉、酒井詩織、真中大輔、

畑福浩希、角田嘉弘、中野裕仁、新田恵美、森下英昭、
北川正、山本毅、林拓也、桜井聡、森下怜、小宮山泰夫、
吉久満佐子、都築美紀枝、石野はるか

<家族会員>

野口博子、野口順子、伊藤詩音

<学生会員>

坪川紗季、千種もも

<法人会員>

横浜薬科大学

(4月1日～5月31日、29名・1法人、敬称略・順不同)

使用済み切手・カード類を送ってくださった方

ご協力ありがとうございました！

村上善子、中山克子、八木成雄、鈴木淳子、櫻田彩子、
小宮輝之、柴山紀子、沢田明宏、西條祝夫、林昌尚、菊
田穰、磯崎肇、長谷川真一

ながつた幼稚園、川崎市消防職員協議会、日本野鳥の会
愛知県支部、岩手県環境生活部自然保護課、NPO法人
日本国際湿地保全連合、公益財団法人 ホシザキグリー
ン財団、公益財団法人 日本鳥類保護連盟京都

(4月1日～5月31日、20名・団体、敬称略・順不同)

インフォメーション

山梨

第1回 企業人のための 生物多様性セミナー 2025

八ヶ岳の田んぼ、水路のいきもの体験か
ら生物多様性を探究

～ネイチャーポジティブを進めるために
できることを考える～

日時: 7月16日(水)10:45 集合 ～ 7月
17日(木)15:00 解散(1泊2日)

場所: 八ヶ岳の里山(山梨県北杜市)

宿泊: 清泉寮 自然学校(相部屋)

※ 数名の相部屋形式

定員: 20名(先着順)

参加費: 一般企業:10,000円(税込)

経団連自然保護協議会 会員企業:
7,000円(税込)

宿泊費: 1泊3食 14,000円(1泊3食)

(このうち2,000円/人 補助有)

お問合せ: ヤマネ・いきもの研究所 セミ
ナー事務局

メール: seminar@yamane-ikimono.org

公式 HP: <https://www.yamane-ikimono.org/>

お申込みはこちら: biodiversity2025.peatix.com

大阪

特別展「昆虫 MANIAC」 大阪

会期: 7月12日(土)～9月23日(火・祝)

会場: 大阪市立自然史博物館ネイチャー
ホール(花と緑と自然の情報センター
2階)

開館時間: 9:30～17:00

(入場は16:30まで)

休館日: 7月14日、22日、28日、

8月4日、25日、

9月1日、8日、16日

主催: 大阪市立自然史博物館、読売新聞
社、関西テレビ放送

入場料: 大人1,800円、高大生1,500
円、小中生700円(当日)※ 前売りは
各200円引

お問合せ: 大阪市総合コールセンター
(なにわコール)

06-4301-7285

公式サイト: <http://www.ktv.jp/event/konchutenosaka>

岡山

作州野鳥の会 写真展

日時: 7月18日(金)～8月29日(金)
9:00～16:00(最終日15:00まで)

会場: 津山圏域クリーンセンター リサイ
クルプラザ

(岡山県津山市領家1446番地)

休館日: 月曜日

(祝日の場合は火曜日が休館日)

問合せ: 0868-78-2683(千原)

インフォメーションの情報募集

自然観察会・シンポジウム・集
会・写真展など、情報をお寄せ
ください。個人宅が連絡先の場
合、機関誌等への掲載は可かど
うかもお知らせください。9・10
月号は7月31日(木)まで。

E-mail: editor@jspb.org

使用済み切手・カード類提供のお願い



使用済み切手やカード類（パスカードは除く）を収集して現金化し、活動資金として自然保護に役立てています。切手は、消印も含めて封筒から切り取った状態でお送りください。なお、未使用切手、書き損じのハガキもよろしかったらお送りください。カード類（テレホンカード、図書カード、各種交通機関カード、ダムカード、文化遺産カード、ジオカード、ゲームカード）は、表面に



セロテープやホチキスを使用しないようお願いいたします。

（担当：岡安）

商品の注文について



商品のご購入は代金先払いでお願いしています。ゆうちょ銀行の定額

小為替、現金書留、郵便振替のいずれかで、商品名・個数・お届け先住所・氏名・電話番号（昼間の連絡先）をお書き添えのうえ、お申し込みください。なお、請求書、納品書を必要とされる場合は、担当までご相談ください。（担当：岡安）

バックナンバーの提供について



観察会等を主催する会員の方に、機関誌バックナンバー+入会案内を無料でお分けしています（ただし、梱包送料はご負担いただきます。金額についてはお問い合わせください）。ご希望の方は、①お名前、②ご住所、③電話番号、④使用予定日、⑤希望数をご記入のうえ、FAX・郵便・e-mailのいずれかで、編集担当の吉田までご連絡ください。

会費の振替用紙について



振替用紙は、会費納入月の統一にあたり、年1回、3・4月号に綴じこ

んでありますので、ご了承の程、お願いいたします。

広告募集

本誌では広告を随時募集しています。種類は、裏表紙カラー、本文カラー1頁、本文モノクロ1頁・1/2頁・1/3頁・1/4頁です。詳細は、編集担当の吉田まで、お問い合わせください。

編集後記

▼デスクワーク中心の毎日ですが、プライベートでは山に行くことが多いほうだと思います。最近気になっているのはジョウビタキ。沢渡も南八ヶ岳も車を降りた瞬間、ジョウビタキが出迎えてくれました。その辺りでは普通に繁殖していますが、初夏のジョウビタキのさえずりは、いまだに違和感ですね…（吉田）

ご支援をお願いします

会費・ご寄付は下記の郵便振替口座へ
口座番号：00150-9-19214
加入者名：公益財団法人 日本鳥類保護連盟
※送金の内訳をお忘れなくご記入ください。

【年会費】

特別支援会員	1口	10,000円
個人正会員	1口	5,000円
家族会員	1口	1,000円
学生会員（学生・生徒）	1口	3,000円
法人会員	1口	20,000円

【一般寄付（愛鳥募金）】

当連盟の活動全般に有効に活用させていただきます。

【使途指定寄付】

シマフクロウ、サシバ、奄美大島の希少鳥類の保護など、使用目的を指定していただく寄付です。

詳しくはHPをご覧ください。

<http://www.jspb.org/kihu>

なお、公益財団法人への2千円を超える寄付金は、寄付者の所得税などの税控除の対象になります。

主な連絡先のEメールアドレス

一般的な問い合わせ：webmaster@jspb.org
愛鳥教材について：岡安 hukuuu@jspb.org
調査・保護について：松永 research@jspb.org
機関誌について：吉田 editor@jspb.org
バードピアについて：岡安 birdpia@spb.org
会員・会費について：吉田 kaiin@jspb.org

私たちの自然

第66巻7・8月号 通巻No.659 2025年7月1日発行
定価1,200円（税込）（会員の購読料は会費に含まれます）
発行：公益財団法人 日本鳥類保護連盟
代表者：小宮輝之 編集長：中島慶二
編集主幹：吉田裕樹
編集委員：藤井 幹
松永聡美

ISSN 0910-6987

©2025 Japanese Society for Preservation of Birds
誌面デザイン・印刷：日本印刷（株）

公益財団法人 日本鳥類保護連盟
〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5 第10田中ビル3F
TEL：03（5378）5691 FAX：03（5378）5693
ホームページ：<https://www.jspb.org/>
事務局業務時間 9:30～17:30（土・日・祝祭日休）



facebook：<https://www.facebook.com/jspb.org/>
X（旧Twitter）：<https://twitter.com/jspb2020>



日本鳥類保護連盟会員限定サイト
<https://www.jspb.org/membership-page>
パスワード：jspb659
会員限定サイトでは『私たちの自然』バックナンバー（過去1年分）閲覧と一部の商品を会員限定価格で購入できます！



未来につながるあなたの想い 遺贈寄付のご案内

遺贈寄付とは

遺贈寄付とは、個人が遺言によって遺産の全部、または一部を個人や団体に寄付することです。日本鳥類保護連盟（以下、連盟）では 2023 年度より READYFOR 株式会社の「レディーフォー遺贈寄付サポート窓口」を通して遺贈寄付を受け取ることができるよう体制を整えました。土地や建物などの遺産も含め遺贈寄付の対象とすることができます。鳥たちが安心して暮らせる、人間と共存、共生できる明るい未来のために、連盟の活動にご支援をご検討いただければ幸いです。



遺贈寄付について
詳しく知る

このような想いから
遺贈寄付を検討されている方が
増えています

想いをつなげたい

遺贈寄付は、亡くなった後も社会に役立てることで、あなたの想いを実現することができます。

生きた証を残したい

遺贈寄付はその想いとともに寄付先団体や身の回りの人々の記憶にのこり、この世に生きた証をのこすことができます

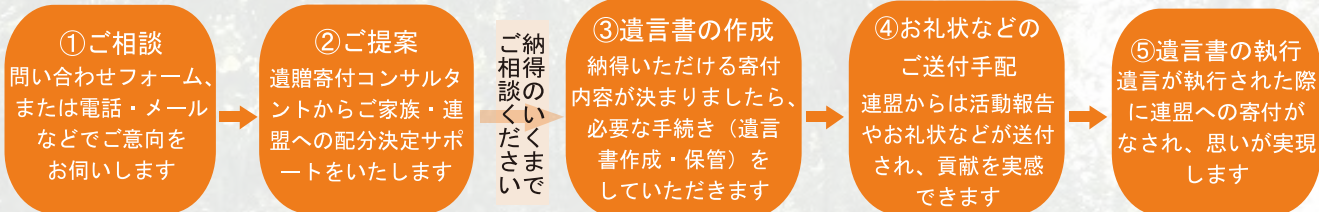
自分で選択したい

遺贈を行うことで、法定相続分に関わらず、自分の財産を役立ててほしい分野に自分の意思でお金をのこすことができます。

生きがいを見つけたい

寄付を受ける側の原動力となるだけでなく、寄付をする側にとっても、自分らしい人生を生きる活力となります。

ご相談から寄付までの流れ



寄付金額は少額からでもご相談いただけます

ご相談可能な遺贈寄付の金額に下限はございません。ご自身およびご家族の将来の生活に支障が出ない形でのご提案をさせていただきます。

のこった財産からでもご寄付いただけます

「寄付はしたいけど今後の生活が不安」という方にこそ、生前は生活を第一に考え、のこった財産を寄付する遺贈寄付はおすすめです。まずはお気軽にご相談ください。

遺贈寄付サポート窓口について

READYFOR 遺贈寄付サポート窓口

<電話でのご相談>

TEL : 0120-948-313（通話料無料）

READYFOR の遺贈寄付専門スタッフがお答えします。お問合せの際は日本鳥類保護連盟ホームページを参照したことをお伝えください。

受付時間：平日 10:00～17:00（年末年始を除く）

<お問い合わせフォーム>

電話で伝えにくい内容などはお問い合わせフォームからのご相談も受け付けています。お問合せ内容の確認後、レディーフォーの遺贈寄付専門スタッフがご連絡を差上げます。

お問合せは
こちらから



レディーフォー 遺贈寄付 検索

日本鳥類保護連盟寄付受付担当

<電話でのご相談>

TEL : 03-5378-5691

日本鳥類保護連盟が行っている自然保護活動についてご紹介し、ご寄付がどのように使われていくかご説明します。そのうえで READYFOR の窓口におつなぎいたします

受付時間：平日 9:30～17:30（年末年始を除く）

<連盟案内の資料請求する>

連盟についてもっと知りたい方は、連盟案内をお送りします。ホームページにアクセスまたはスマートフォンで右側の QR を読み込んでお問合せください。

資料請求は
こちらから



遺贈寄付 HP : <https://www.jspb.org/donation>



カンゼンの鳥の本

※本文にはすべてフリガナがふってあります。 対象 小学校中学年以上

鳥のなかま&分類・系統図鑑

最新刊

監修 小宮輝之 編集 ポンプラボ

地球上に約1万1000種いる鳥たちの“なかま分け”を大解剖!

知れば知るほど知りたくなる「おもしろふしぎ鳥類学の世界」を
毎回テーマごとにのぞいてきたこの鳥図鑑シリーズ。
「しぐさ・行動」「食べもの」「親子・子育て」「落としもの・足あと」
に続く第5弾となる本書では、鳥たちの
「なかまとつながり(分類・系統)」をテーマにお送りしていきます。

定価:1,870円(税込) A5判 160頁 ISBN:978-4-86255-751-3



鳥の落としもの&足あと図鑑

監修 小宮輝之
編集 ポンプラボ

定価:1,870円(税込)
A5判 160頁
ISBN:978-4-86255-727-8

鳥たちの
「フィールドサイン(痕跡)」
がわかると野鳥たちの
生態や行動を
推測できるようになる!!



鳥の親子&子育て図鑑

監修 小宮輝之
編集 ポンプラボ

定価:1,870円(税込)
A5判 160頁
ISBN:978-4-86255-701-8

次世代へつなぐ
命のバトン
びっくり&感動!
十鳥十色の
子育て模様をせまる



鳥のしぐさ・行動よみとき図鑑

監修 小宮輝之
編集 ポンプラボ

定価:1,870円(税込)
A5判 160頁
ISBN:978-4-86255-666-0

鳥のことが
もっと知りたい!
あの鳥、なにしているの?
鳥たちの驚異の
パワフルライフ!



鳥の食べもの&とり方・食べ方図鑑

監修 小宮輝之
編集 ポンプラボ

定価:1,870円(税込)
A5判 160頁
ISBN:978-4-86255-676-9

気になる
食事メニューから
からだのひみつまで
鳥たちの食まわり事情を
まるっと大紹介!

※(公財)日本鳥類保護連盟では、こちらの商品は扱っておりません。直接、株式会社カンゼンにお問合せいただきますよう、お願いいたします。

